

異なる者同士が共にあろうとするために、培ってきた秩序やルール。過去に学び、エスカレートや破局を避けようとする力。人類がともし、守ろうとしてきた光が、弱まってはいないか。何ができる。灯を消さぬために。

多国間主義や秩序の危機 平和80年の歩み生かして

—米科学誌が毎年発表する「終末時計」で、地球滅亡（深夜0時）までの残り時間は昨年、核使用のリスクの高まりなどから史上最短の89秒になりました。国連の軍縮部門トップとして、人類の危機の深まりをどう捉えていますか。

「私だけでなく、事務総長を始め国連で働く人間が感じているのは、これまで人類が大切に築いてきた秩序が崩壊しつつある、という深刻な危機感です。第2次世界大戦の惨禍を経てつくられた、平和維持などのための国連憲章を中心とした国際秩序や多国間主義が、うまく機能しなくなっているからです」

—大きな責任を負う安全保障理事会が、拒否権を持つ常任理事国に振り回され、機能できずにいます。「ウクライナやガザでの戦争で、『大国一致の原則』のために本来の役割を果たせていないことが、世界に失望を与えているのは間違いないでしょう。安保理の機能不全の1因は、常任理事国（米英中仏ロ）が、彼らに与えられた拒否権を『特権』と捉えているかのような行動を繰り返していることです。しかし、国連が構想された際に常任理事国に期待されたのは、平和維持のための『特別な責任』だったはず。その原点を取り戻すことが、大きな課題です」

「他方で、東西冷戦期は安保理決議が1本しか通せない年もありましたが、この1年では30本以上が採択されています。常任理事国の対立がない問題は、決議を採択できる状態です。国連がなくなってしまうと、世界はより危険になるのは間違いないです。引き続き取り組むべき歴史的な課題だけでなく、人類全体に迫る新たな危機があるからです」

—具体的には、どのような「軍縮分野でいえば、技術開発によって『戦争』の姿が変わりつつあります。陸海空に加え、宇宙やサイバーといった領域でも人類は活動するようになり、軍事概念も広がりつつあります。たとえばウクライナでの戦争は、2月24日にロシアの武力侵攻が始まったとされますが、実際はその前日から宇宙やサイバー空間での攻撃が行われていました」

「さらに、AI（人工知能）が軍事目的や情報操作に利用される危険性も高まっています。自律的に人を殺害するAIを搭載した兵器を、どう考えるか。核兵器のシステムにAIが搭載され、人間ではなくアルゴリ

なかみつ いずみ
中満 泉さん

国連事務次長・軍縮担当上級代表

1963年生まれ。米ジョージタウン大学大学院修了後、国連難民高等弁務官事務所。一橋大学教授、国連平和維持活動（PKO）局アジア中東部長、国連開発計画（UNDP）総裁補などを経て17年から現職。著書に「危機の現場に立つ」など。

ズムが自動的に発射指令を出す事態すら現実味を帯びています」

—第1次大戦の惨禍を受け、毒ガス使用を規制する条約が出来たように、そうした新たな軍拡を食い止めることはできるでしょうか。

「戦争にも（無差別攻撃を禁じる交戦法規など）国際法上のルールがあり、違反すれば裁きを受けます。いま私たちは、それぞれの技術開発に応じた規制について、懸命に対応しようとしています。ただ、必ずしも個別のテクノロジー分野ごとに対応すれば済むわけではありません」

「たとえば『機械が人間の命を奪う決定を下す』ことになれば、共通の倫理に基づく人間の説明責任が前提だった従来の国際法の根幹を揺るがす事態になります。国際法の体系を、どう守っていくのか。私たちは、従来の『共通ルール』が無視され得る、極めて危険な瀬戸際に立たされているのです」

—中満さんは日本人9人目、そして女性では日本人初の国連事務次長です。灯を消さないために、日本が果たせる役割はあるでしょうか。

「確かに以前ほどの経済力はないかもしれませんが日本は国連として多国間主義の現場で存在感を発揮しつつと思っています。日本を常任理事国に加える『国連憲章の改正が難しいから、日本は国連で大きな役割を果たせたい』、というのは誤りです。たとえば常任理事国の拒否権を規制しようとする動きでは、リヒテンシュタインなどの小さな国々が指導力を発揮しています」

「私はPKOにも携わりましたが、そもそもPKOは国連憲章に規定がなく、カナダのようなミドルパワーのアイデアと努力で実現したものです。英仏などがエジプト侵攻した1956年の『スエズ危機の際も安保理は機能せず、事務総長は朝鮮戦争の際に採択された決議を使い、やはり憲章に規定のない緊急特別総会を開いて国連緊急軍を創設しました。国連の歩みは、こうした創造的なアイデアの歴史でもあります」

「これからの世界で大切なのは、グローバルサウス（新興国・途上国）の理解と支持を得ることでしょう。その際、平和国家としての80年の歩みこそが、日本の財産になります。昨年、当時の石破茂首相は退任前におこなった国連総会での一般討論演説で、『アジアの人々は戦後、日本を受け入れるにあたって寛容の精神を示して下さりました』と述べ、その寛容さに支えられてきたことを強調しました。排外主義や近隣国への敵対感情ではない、こうした姿勢は、とても重要なポイントだと感じました」

—次代を担う、日本の若い世代についてはどう感じていますか。

「正直、心配しています。日本の若者は最近、海外に興味を持っている人と、まったく関心を持たない人に二極化しているのではないのでしょうか。経済的な余裕がなくなったせいか外に目を向けなくなり、国内の格差や不平等へのフラストレーションが排外主義に向かうようなことになる。戦前の繰り返しにならないかと心配です」

「日本人が本心に誇れるのは、戦後80年、歴史の反省の上に立ち、国際社会に平和国家としてどう貢献できるのかを真剣に考えてきたことだと思えます。それを『自虐的な』などと批判する人がいるのは、分かっています。しかし私は国連の場で、国際公務員ですから国連前面に出すわけではないですが、日本人としての誇りをいつも感じています」

「最近、日本人のSNS発信を見ていると、どうもこんがらがっている人が多いように見えます。平和国家として、80年間かけて、私たちは信頼される地位を築いてきたのです。それをこそ誇りに思うべきだと、若い人に伝えたいです」

小林正明撮影

（聞き手・池田伸登）